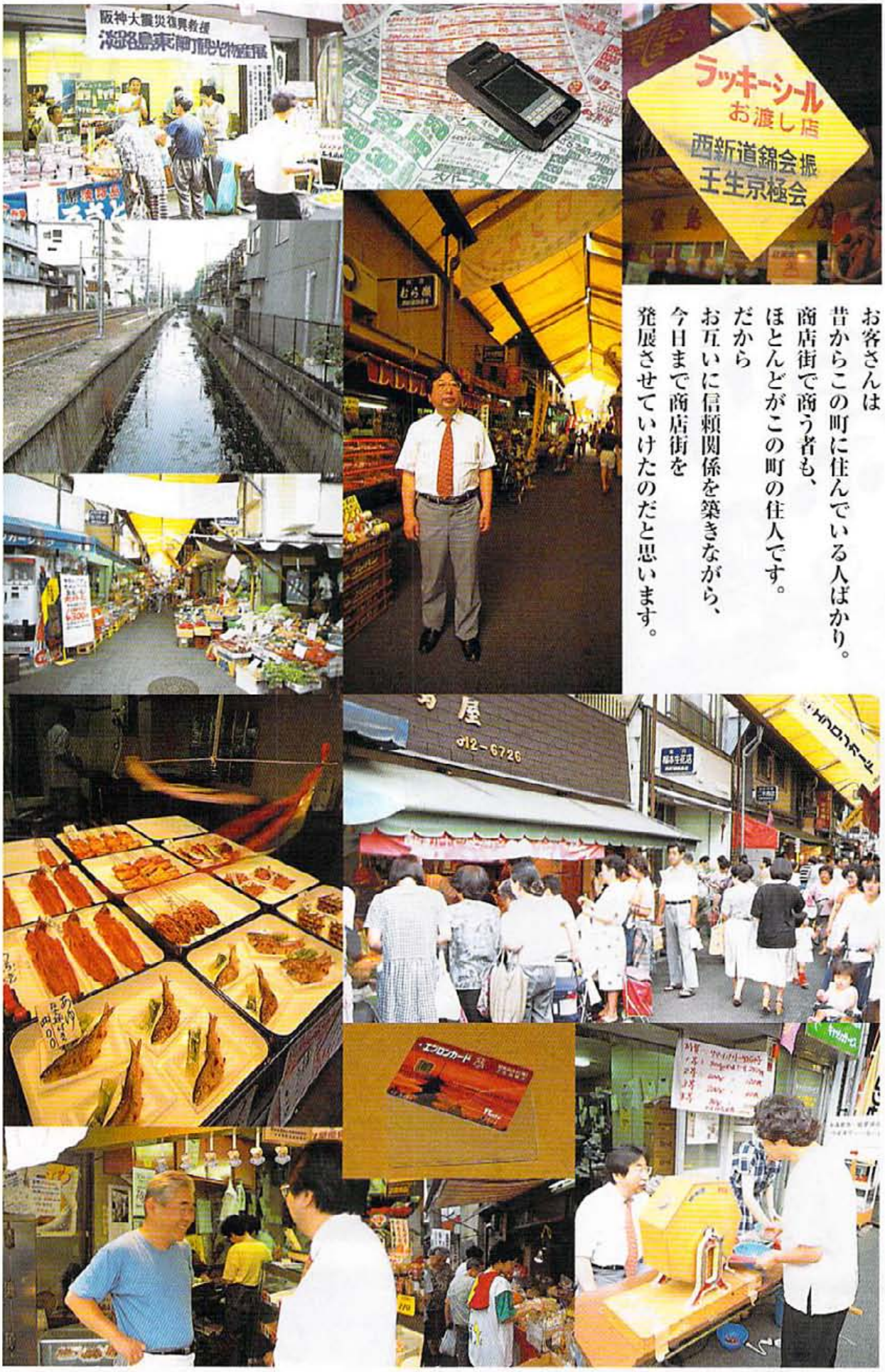
すまいづくり 未来へ知らべる標の町

第四十八弾
～原田完さんの“今を生きる商店街・西新道錦会商店街”編～

すすぼけた看板。
ふるびた漆喰の壁。
ひしめく雑踏。
あまい、からい、さまざまな匂い。
ゆきかう呼び声。
あふれる活気。
見慣れた町のなつかしい商店街…



お客さんは
昔からこの町に住んでいる人ばかり。
商店街で商う者も、
ほとんどがこの町の住人です。
だから
お互いに信頼関係を築きながら、
今日まで商店街を
発展させていけたのだと思います。

すいばこ知らず標町

嵐電の踏切を越え、小さな橋を渡る。と、そこには、なつかしい光景がひろがっていた。こどものころに見た、遠いかすかな記憶……

流れてゆく雑踏の両脇にならぶさまざまな商店。古色のついた看板。すこしよごれた漆喰の壁。めいめいがちいさな間口にところせましと商品を積んだり、広げたりしている。

呼びかう声。人と人のすきまから、たちのぼる活気。

目に映るものだけではない。

川魚屋からながれてくる鰻の蒲焼きの匂い。青果店からただよう甘くて、青々とした香り。乾物屋、肉屋、いろんな匂いや香りがまざりあって、ああ、これが商店街だったと、妙にしみじみ納得するのだ。

日々の暮らしの糧を、その日使えるだけのわずかなお金でまかなっていた時代。新聞紙にくるまれた野菜やコロッケを大事に抱えて家路についたあの頃。下町の商店街は、ちょうど秋の夕暮れのように、心の中をわずかな時間だが、いつも、あたたかく照らしてくれた。

いつのまにか、夕餉の支度をスーパーマーケットですることになった今。こうこうと灯る蛍光灯の中で、きれいに包装された肉や野菜や果物を買うことがあたりまえになった今日。おじさんやおばさん、おネエちゃん、おニイちゃんが、威勢のよいかけ声をあげながら、野菜や肉や魚を売っていたことを思い出すこともなくなった。

とりとめもない会話をかわしながら、すすけぼけたアーケードの中で、雑然とした気やすさと活気の中に身を置いていたことを忘れてしまっている。

大手SM(スーパーマーケット)が全国に巻き起こした流通革命は消費の構図を大きく塗り替えた。商品を完全に規格化し、安定して供給することはもはや常識である。しかし、工場生産品はもちろん、農産品や水産品がそれによって受けた影響のなかには、釈然としないことが、ないわけでもない。

たとえば、みごとにかたちの整った果実やおなじ大きさの野菜。何の不思議もない光景だ。しかし、これほど不自然なこともない。自然の産物は本来、外見の規格化などできないはずである。そこには、不自然を強要する"何か"が行われている。

SMやSSM(スーパー・スーパーマーケット)の出現で、たしかに消費生活は便利になった。だが、それと引替える格好で、置き去りにしてしまったものがある……そんなことを考える時、遠い記憶の中にうかぶ、あの商店街の賑わいが、なつかしく思いおこされるのだ。

京都市中京区壬生下溝町。

阪急西院駅から西へ約五〇〇mほどゆくと、そこに西新道錦会商店街の入り口がある。道幅は五mほどもあるだろうか。南へむかって、両側にはさまざまな商店がならぶ。無数に行き交う人々。その雰囲気は、まさにかつての商店街そのものだった。

この町は、もともと壬生友禅で支えられた下町である。商店街として出発したのは昭和二十八年頃。以来、地域の人々とともに信用と信頼をつみ重ねながら、成長をとげた歴史をもつ。

四条の錦通りのような、洗練された雰囲気はないが、これほどの活気をみせる商店街にであったのはこれがはじめてのことだ。

応対していただいた錦会商店街・事務局長理事の原田さんは、

「人の出入りがほとんどない町ですからね。お客さんは昔からこの町に住んでいる人ばかりです。商店街で商う者も、ほとんどがこの町の住人です。だからお互いに信頼関係を築きながら、商店街を今日まで発展させていけたのだと思いますよ」

と振り返る。

だが、決して順風満帆であったわけではない。昭和四十一年にはすぐそばに一〇〇店舗を擁する大型小売市場が現れ、競合にさらされた。もちろん錦会商店街としては反対を表明したが、地域の顧客には、よりよいものがより安く手に入る機会でもある。競争は必要であり、ただ反対するだけでは顧客の支持を得られない。

そこで、商店街は早朝から夜おそくまで営業時間を延長、新型の小売市場に対抗するという手段にでた。その動きの中で、

『商店街の鉄則は、商人がその町に住むことである』

という認識が商店街事務局を中心に改めて生まれた。それはやがて"地域に密着した経済事業の可能性"を常に模索してゆかなければ生き延びる道はない、という結論にまで発展したという。

それ以降、この町の商店街は、一見ユニークとも思えるさまざまなアイデアを実現しはじめた。法律相談や医療、保険、レジャー、ブライダル、果ては家の修理まで相談を受け付ける外商事業。事業収益という点では課題を残しているものの、地域の顧客へ商店街を暮らしのパートナーとアピールした点では大きな成果をあげている。

また、プリペイドカードの導入も実施。銀行と提携、一万円から七万円のワクを用意、利用率も順調にのびている。もとは若い世代の顧客に楽しく買物してもらおう、という意図ではじめられたこのシステム、まっさきに喜んだのが地域のお年寄りだった、というのは興味深い。

もちろん商店街での導入は全国でもきわめて稀な例である。

さらにこのカードとの関連で家庭用ファクシミリを月額八〇〇円でリースしようという計画がある。しかもカードの利用額が一定のとき、いってもそれほど高額ではない)基準に達すれば、事実上タダでレンタルできるしくみだ。現在、毎週散布するチラシのかわりに、ファクシミリを活用しよう、というのがねらいだ。その行く末には通信網を活用、毎日好きな時間に商品を届ける個別配達システムを完成させようとの構想もある。

なつかしき風情の西新道錦会商店街。しかしその中には、今を生きる新しい着想と行動力が、ひそやかに躍動していた。

文／三村 深・写真／小笠原 圭彦

プロフィール　原田 完

昭和二十五年生まれ。群馬県出身。十八年前より西新道錦会商店街組合の専従者として活躍。現在、事務局長理事。